

ヘウレーカ!

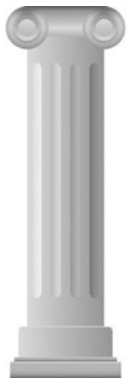
なるほど、そうか

第54回

ジュニア育成2

— スポーツ観の違いから見える課題 —

喜田任紀



? 根っこはスポーツ観の違い

ジュニア育成をテーマに記事を続けます。いろいろと調べていると、日本と英国などを比べてたとき、大きな違いのひとつは「スポーツ」観の違いにあるように思えます。日本では長らく、学校教育における「体育」が子どもたちの運動体験の中心を担ってきました。体育は体力づくりや健康維持、規律や協調性といった集団生活の基礎を育むものとして重視されてきましたが、突然のように「スポーツ」という言葉に置き換えられたために、「スポーツ」競技」という狭い認識が、未だに社会に根強く残っています。ゴルフにも同じ意識が感じられます。

一方、英国をはじめとする欧米諸国では、「体育」と「スポーツ」をはっきりと分けて捉えています。体育は学校教育の一部として位置づけられ、基礎的な身体能力や運動習慣を育む役割を担います。ここは日本と大きな違いはありませんが、スポーツは地域や社会の文化活動として扱われ、誰もが生涯を通じて楽しむものとされています。この認識の違いが曖昧になっているために、ジュニア育成にも、その曖昧さが反映されているようです。

いま日本では、生徒数の減少や先生の働き方改革などから学校単位での部活動が維持できなくなり、地域のスポーツクラブとの提携がいられています。競技志向の強い子どもたちが「スポーツ」に参加する傾向が強くなります。そのため、未経験者や初心者に広く門戸を開く仕組みは限定的です。対して英国では、学校や地域のクラブ活動を通じて、スポーツはまず「楽しむ」ことを重視して導入されます。その後、子どもの関心や能力に応じて段階的にステップアップできるよう、制度的な整備がされています。この構造的な違いが、ジュニア育成のあり方を大きく左右しているのです。

Sportの考え方と学校教育における役割

英国のジュニア育成制度を理解するうえで欠かせないのが、「sport」という言葉の捉え方です。日本では、国民体育大会が「国民スポーツ大会」へと改称されたものの、依然として「体育」の延長として語られることが多く、制度設計においても体育的発想が強く残っています。つまり、スポーツは体力づくりや規律訓練の手段とみなされ、教育制度の枠内で管理されるものと理解されがちです。

一方で、英国をはじめとする英語圏では、「physical education (PE)」と「sport」を明確に区別しています。PEはあくまで学校教育の一環であり、児童生徒が基礎的な運動能力を身につけ、健康や協働性を学ぶ場です。授業時間の中では種目としての専門性よりも「身体を動かすことへの理解と習慣化」が目的化されています。それに対して「sport」は、学校の外あるいは課外活動の領域で展開される、文

化的・社会的活動です。クラブ活動や地域クラブとの連携を通じて、子どもたちが好きな種目を楽しみ、挑戦し、仲間を得る場とされています。

この区別は制度の設計にも直結しています。英国の学校ではPEの授業で幅広い運動体験を提供しつつ、放課後には「school sports club」として地域クラブと連携した活動が展開されます。政府も「School Sport and Activity Action Plan」などを通じて、PEとsportを運動させながらも、それぞれの役割を分けて整備しています。PEが「教育」としての最低限の運動経験を保証し、sportが「文化」としての継続参加を支えるという二層構造があるのです。

この視点で改めて日本を見直すと、「体育」と「スポーツ」が同義語のように扱われ、結果として部活動が教育制度の中で過大な役割を背負わされてきたことが分かります。英国では、PEは授業、sportは地域やクラブ活動、と分けることで、学校に過

度な負担をかけず、地域社会と一体となった持続可能な仕組みを作り出しているのです。

こうした整理を踏まえると、ジュニアゴルフのような専門スポーツの育成も理解しやすくなります。ゴルフはPEで基礎運動やスポーツ体験の一環として扱われ、興味を持った子どもはschool sports clubや地域クラブを通じて段階的に深める。これが「Junior Journey」の背景にある思想です。日本における制度設計も、まず「体育＝PE」と「スポーツ＝sport」を切り分け、その上で地域クラブと連携する仕組みを整えることが第一歩となるでしょう。

日英のジュニア育成アプローチ比較

前号で掲載した日本と海外（英国・米国）のジュニア育成の仕組みを、改めて見ていただけると、違いがお分かりいただけると思います。

海外型（英国・米国）の特徴

・ピラミッド構造の下層を広く作り、学校授業や放課後プロ

グラムで誰もがゴルフに触れられる

・道具の貸し出しや簡易クラブ（SNAGなど）を活用し、経済的ハードルを下げる

・First Teeが掲げる「Home stay」「Respect」などのコアバリューに代表されるように、人格形成を重視する

・年齢やスキルに応じたステージ制カリキュラムを導入し、バッジや認定証で達成感を可視化する

・初心者や障害を持つ子どもも対象とし、全員参加型のアプローチを採用

日本型の特徴

・入り口で、すでに「競技の入口」となっており、

家族がゴルフ経験者である場合や練習場に通っているケースが多い

・指導はスイング技術や飛距離など、競技結果に直結する要素に重点を置く

・育成対象は「勝つための

表1 海外（英国・米国）と日本のジュニア育成の比較

項目	England Golf & The Golf Foundation (Junior Journey) / First Tee (米国)	日本のジュニア育成
対象層	初心者から上級者まで全レベル。特に小学生以下の未経験層を広くカバー	既にゴルフ経験があり、基礎ができている子が中心。アスリート志向が強い
目的	生涯スポーツとしての普及と裾野拡大。人格教育やライフスキル育成も重視	競技成績向上とプロ・トップアマ輩出を重視
入口の広さ	学校・地域クラブ・イベント・ボランティアネットワークなど多様	主にゴルフ場やスクールに来る子が対象。入口は狭め
システム化	年齢・経験別のカリキュラムやステージ制で進級。全国統一の認定・評価システム	指導内容・評価基準は指導者や団体ごとに異なる。統一制度はほぼなし
関わる組織	ゴルフ協会・教育機関・地域クラブ・非営利団体が連携	ゴルフ連盟や協会は主に競技会運営。普及段階での学校連携は少ない

ジュニア」に集中し、途中離脱層への再アプローチは少ない

・全国統一のカリキュラムや評価制度がほとんどなく、スクールやコーチによって内容がばらつく

このように、海外は「裾野を広く作り、全員が参加できる仕組み」を重視するのに対し、日本は、前号で紹介しましたが、JGAや各地区連盟のジュニア育成は、「狭い入口から選ばれた子をトップに育てる」構造に偏っているのです。

イングランドの制度設計——Junior Journeyの全体像

英国のジュニア育成を語るうえで欠かせないのが、England GolfとThe Golf Foundation（ゴルフ財団）が共同で進める「Junior Journey」です。これは、子どもたちがゴルフと出会い、成長し、クラブ会員として定着するまでの一連の流れを制度的に設計した包括的フレームワークです。



表2 5つのステージによる育成設計

1. 学校・地域コミュニティでの紹介 (Introduction to Schools & Communities)	→	学校の体育授業や放課後クラブを通じてゴルフ体験の機会を提供。SNAG (Starting New At Golf)
2. クラブでの導入 (Club Introduction)	→	学校や地域で体験した子どもを地元クラブに受け入れる仕組み
3. スキル・ゲーム開発 (Skill/Game Development)	→	年齢や技術に応じたカリキュラムで練習を段階化
4. ゴルフコース体験の促進 (Golf Course Development)	→	実際のコースでのプレーを段階的に経験。GolfSixesの導入
5. クラブ会員としての継続 (Golf Club Membership & Love of the Game)	→	一定のステージを経た子どもをクラブ会員として迎え入れ、継続的な成長を支援

5つのステージ

Junior Journey は、以下の5段階で構成されています。

1. 学校・地域コミュニティでの紹介 (Introduction to Schools & Communities)
 2. クラブでの導入 (Club Introduction)
 3. スキル・ゲーム開発 (Skill/Game Development)
 4. ゴルフコース体験の促進 (Golf Course Development)
 5. クラブ会員としての継続とゴルフ愛の醸成 (Golf Club Membership & Love of the Game)
- このステージ制により、子どもたちは段階的にゴルフに親しみ、無理なく次のステップへと進むことができます。学校や地域での体験から始まり、クラブ導入、スキル開発、コース体験を経て、最終的にはクラブの一員として定着するという

流れです。5番目のステージは、ゴルフ人口が減少する中で、クラブ運営の中核である会員の確保にもつながる取り組みといえます。

具体的プログラム

次号以降で紹介する予定ですが、Junior Journeyには、いくつかのプログラムが用意されています。代表的なプログラムには次のようなものがあります

- ・ **Unleash Your Drive**：学校や地域団体をゴルフクラブとなぎ、子どもたちに初めてのゴルフ体験を提供
- ・ **Golf Sixes**：6ホールの短縮版ゲームを通じて、チーム感覚と楽しさを育成
- ・ **Junior Hubs**：ジュニア育成に注力するクラブを認定し、資源提供や広報支援を行う

日本でも取り組みませんか

では、このJunior Journeyの仕組みを日本に応用しようと考え、近年、日本では学校部活動の縮小が進み、地域クラブとの連携が模索されており、この

仕組みは、まさに英国型の「学校↓地域クラブ↓競技」へとつながる道筋といえます。

日本版アレンジモデル

1. 学校・体育や総合学習の環境として地域クラブと連携し、ゴルフ体験を導入
 2. 地域クラブ導入・放課後や週末に地域のスポーツクラブが受け皿となる
 3. スキル開発・全国共通の認定カリキュラムを導入し、継続的な学びを保証
 4. コース体験・ショートコースやジュニア大会を活用して競技経験を積む
 5. 継続参加・地域クラブやゴルフ場が、子どもたちを会員として受け入れ、生涯スポーツとしての基盤を作る
- 指導者にとっても制度があることで「何を教えるべきか」、「どう評価するか」が明確になります。保護者も、全国統一のステージ制や認定制度があれば安心して子どもを預けられます。子どもたちにとっても、自分の成長を客観的に確認できる仕組



みは確かなモチベーションになります。

一例として、PGAのジュニアリーグをこの制度に組み込めば、底辺拡大からアスリート予備軍育成までカバーできると期待できるのではないだろうか。

JGAや地区連盟のジュニア育成事業につなげば、イングランドのような一貫したジュニア育成プログラムになり、学校との接点も、クラブ活動の支援でつながりが始められるのではないだろうか。もちろん、スポーツ庁の支援も業界として求めるわけです。

次号では、Junior Journeyのゲームプログラムを中心に紹介する予定です。英国でのジュニア育成は、ゴルフ財団の存在に象徴されるように、ゴルフ協会やPGAなど主要なゴルフ団体がまとまって活動を支援する仕組みが整っている点が特徴です。

■ **Junior Journey URL** : <https://www.golf-foundation.org/schools/school-games/>

